

移流分散現象の確率論的解析

STOCHASTIC ANALYSIS OF LONGITUDINAL DISPERSION

大分工業高等専門学校 正会員 島田 晋

§ 1. まえがき

せん断乱流場における拡散現象では、Euler 流の解析手法(力学モデル)と Lagrange 流の手法(確率モデル)を統一的に用いることが必要である。G.I.Taylor(イ)に始まる移流分散現象の解明は、J.W.Elder(ハ)や H.B.Fischer (ヘ)により理論と実験の面から、移流分散係数についてほぼ満足される結果が得られている。また移流分散過程(流れ方向の濃度分布の経時変化)については、R.Aris(ロ)のモーメント法による解析、N.Yotsukura等(ニ)の数値解、他にモーメント法と数値解法を実施した(リ)があるが、十分に解析が行なわれているとは言い難い。この講演論文では、確率論的解析方法(特性関数とフーリエ変換)により移流分散過程を解析し、濃度の空間分布と経時変化の代表例を図示し、移流分散過程を明らかにする。

< FUNDAMENTAL EQUATIONS >

equation of motion :

$$G + \frac{1}{r} \frac{d}{dr}(r\tau) = 0 \quad \dots \quad (1)$$

pressure gradient divided by dencity :

$$G = -\frac{1}{\rho} \frac{\partial p}{\partial x} = \frac{U^* \uparrow 2}{a/2} \quad \dots \quad (2)$$

conservation of mass :

$$\frac{\partial c}{\partial t} + u \frac{\partial c}{\partial x} = \frac{1}{r} \frac{\partial}{\partial r}(re \frac{\partial c}{\partial r}) \quad \dots \quad (3)$$

diffusivity by Reynolds's analogy :

$$e = -\tau / \frac{du}{dr} = -c / \frac{\partial c}{\partial r} \quad \dots \quad (4)$$

mean velocity : $U_m = \langle u \rangle \quad \dots \quad (5)$ velocity defect : $v = U_o - u \quad \dots \quad (6)$ mean velocity defect : $V_m = U_o - U_m \quad \dots \quad (7)$

description of moving coordinate :

$$X = x - U_m t \quad \dots \quad (8)$$

§ 2. 移流分散の基礎式

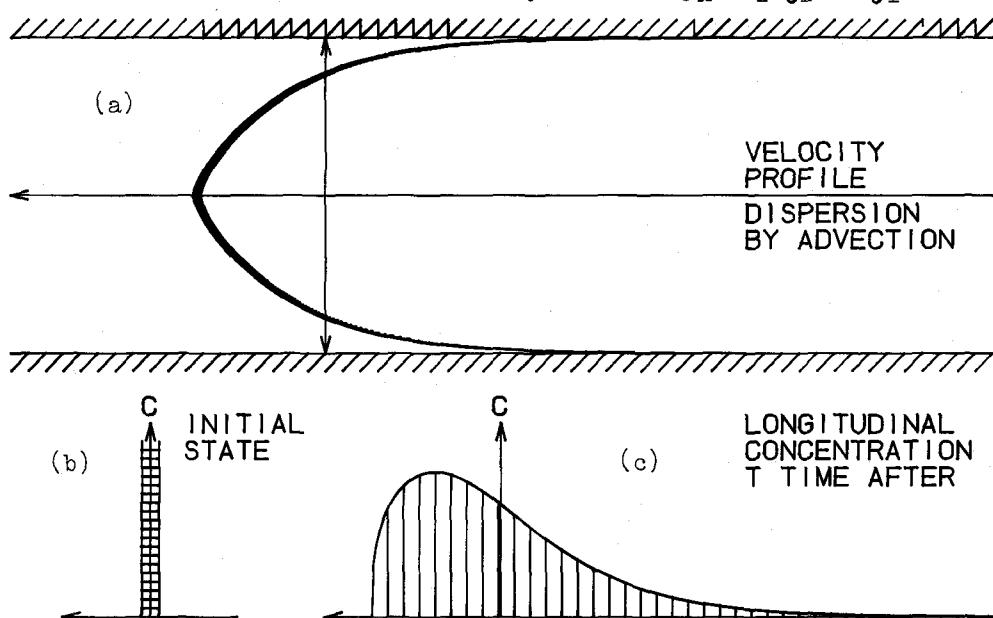


FIG.1 INITIAL DISPERSION OF CLOUD OF CONTAMINANT IN TURBULENT FLOW THROUGH A PIPE. SHOWING THE ASSYMMETRY CAUSED BY ADVECTION

G.I.Talor(イ)にならって円管内の流れについて cumulating distribution function of v : いて移流分散の基礎式を導びき , この式が水路の形状によらないことを示し , 移流分散係数の推算式を求める。ここで流速 u やせん断応力 τ 等は時間平均された量である。運動方程式(流体に関するつり合いの式)は(1)となり , 流体の密度 ρ で除した圧力こう配を G で表わす。 \uparrow はベキ乗 , U^* はマツ速度 , a は円管の半径を示す。質量保存の式(拡散方程式)は流れ方向の拡散を無視して(3)となる。 c は物質の濃度(注目している流体粒子の存在確率)を表わす。運動量輸送と質量輸送の類似性より拡散係数は(4)から求められる。断面内最大流速を U_0 とすれば , 速度欠損 v は(6), 平均速度欠損 V_m は(7)となる。(8)の移動座標を用いて(3)を書き直すと(9)になる。 v の累積分布関数 $F(v)$:(10), 確率密度関数 $f(v)$:(11)を用い(1)を考慮して , 独立変数 r を v に変換すると(9)は(12)で表わされ , 移流分散の基礎式が導びかれた。(12)は一次元の拡散現象における v と Z の結合密度関数についての式とも解釈できる。また移流分散係数は(13)の三重積分で示され , これを部分積分し径深を R とすれば(14)となる。ここで(12),(13)または

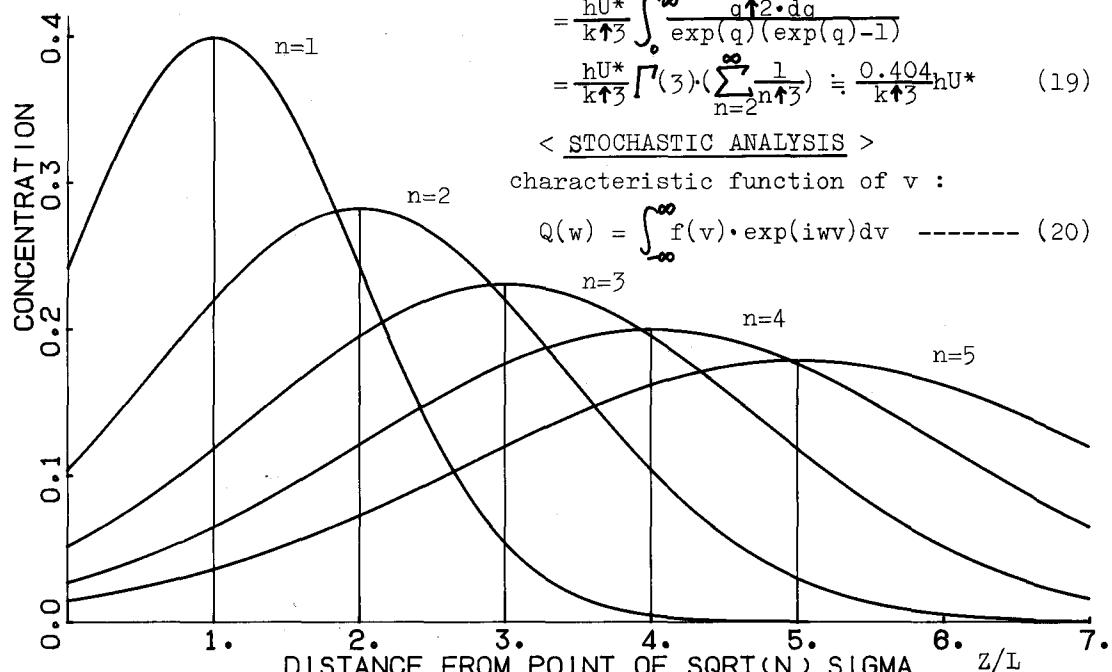


FIG.2 SPACE DISTRIBUTION OF CONCENTRATION
(NORMAL DIFFUSION PROCESS)

(14)は独立変数が v となり、水路の形状によらない式といえる。(12)で c の所に v を代入すれば右辺は $-G$ となり(1)を満足していることが確認できる。次に J.W.Elder(ハ)によって得られている二次元開水路における分散係数を速度欠損(15), 累積分布関数(16), 確率密度関数(指數分布):(17)を用いて求めると(19)になる。 K は Kármán 定数, $U(v)$ は単位階段関数を示す。

§ 3. 確率論的解析

確率論的解析方法(特性関数・フーリエ変換・たたみこみ定理等)により、原点に集中的に投入された物質の t 時間後の流れ方向の断面平均濃度分布 $C(Z, t)$ を求める。 v の特性関数は確率密度関数のプラス i フーリエ変換として(20)で表わされ、平均値 V_m は(21), 分散 V_s は(22), 3次キュムラント V_3 は(23), 4次キュムラント V_4 は(24)となる。断面内の流体粒子がある相関時間 T だけは、確率密度関数が $f(v)$ で表わされる速度で動くものと考えると、初期濃度分布が FIG.1(b) に示すようなデルタ関数のとき、移流作用により FIG.1(a) のような分布形状となる(チ)。これを流れ方向の濃度分布 $C(Z, T)$

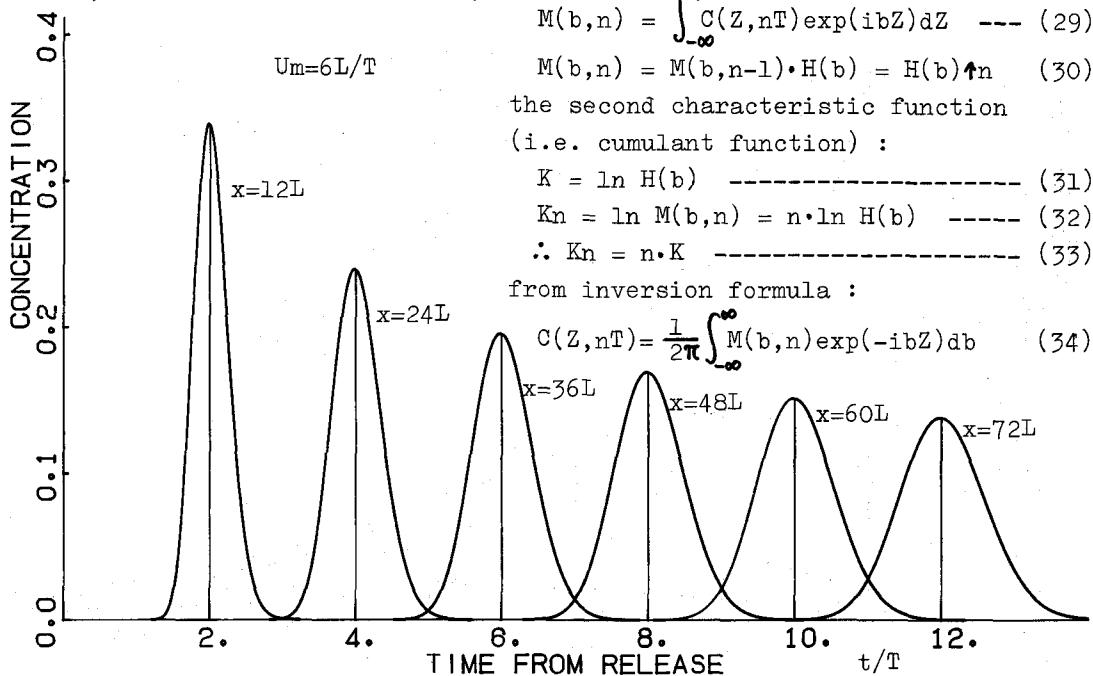


FIG.3 CHANGE OF CONCENTRATION AT FIXED POINT
(NORMAL DIFFUSION PROCESS)

として求めると、FIG.1(c)に示すような断面内流速の確率密度と同形の(25)となる。ここで Z は分散雲先端からの距離である。 $C(Z, T)$ のプラスイフーリエ変換 $H(b)$ は、 v の特性関数 $Q(w)$ においてパラメーター w を bT に置き換えたものに等しくなる(26)。次に nT 時間後の濃度分布は、(27)と(28)に示すように $(n-1)T$ 時間後と T 時間後の濃度分布のたたみこみとして得られる。 $C(Z, nT)$ のプラスイフーリエ変換 $M(b, n)$:(29)は、(30)のように1ステップの変化(推移確率)の特性関数 $H(b)$ の n 乗として表わされる。また1ステップと n ステップの第二種特性関数(即ちキュムラント関数):(31)・(32)は、(33)で結ばれ偶然累加現象であることを示している。そして逆変換の公式(34)からも t 時間後の濃度分布が求められる。濃度分布の重心を示す Z の平均値 Z_m は(35)、分散 Z_s は(36)、3次キュムラント Z_3 は(37)、4次キュムラント Z_4 は(39)となり、濃度分布が正規分布からどう

$$\text{mean value of } Z : Z_m = \langle Z \rangle = nVmT \quad (35)$$

$$\text{variance} : Z_s = \langle (Z - Z_m)^2 \rangle = nVs(T^2) \quad (36)$$

third cumulant of Z :

$$Z_3 = \langle (Z - Z_m)^3 \rangle = nV^3(T^3) \quad (37)$$

skewness of Z :

$$S = Z_3/Z_s^{3/2} = V^3/Vs^{3/2}/\sqrt{n} \sim \sqrt{T/t} \quad (38)$$

fourth cumulant of Z :

$$Z_4 = \langle (Z - Z_m)^4 \rangle - 3Z_s^2 = nV^4(T^4) \quad (39)$$

excess of Z :

$$E = Z_4/Z_s^2 = V^4/Vs^2/n \sim T/t \quad (40)$$

dispersion coefficient :

$$D = Z_s/(2t) = VsT/2 \quad (41)$$

$$\text{correlation time} : T = 2D/Vs \quad (42)$$

NORMAL DIFFUSION PROCESS

$$\text{mean value of } v : V_m = \langle v \rangle$$

$$\text{variance of } v : V_s = \langle (v - V_m)^2 \rangle$$

probability density function of v :

$$f(v) = \frac{1}{\sqrt{2\pi}Vs} \exp\left(-\frac{(v - V_m)^2}{2Vs}\right) \quad (43)$$

$$Q(w) = \exp(iwV_m + (iw)^2 \cdot Vs) \quad (44)$$

$$C(Z, T) = \frac{1}{\sqrt{2\pi}Vs \cdot T} \exp\left(-\frac{(Z/T - V_m)^2}{2Vs}\right) \quad (45)$$

$$H(b) = \exp(ibTV_m + (ibT)^2 \cdot Vs) \quad (46)$$

$$M(b, n) = \exp(nibTV_m + n(ibT)^2 \cdot Vs) \quad (47)$$

$$C(Z, nT) = \frac{1}{\sqrt{2\pi}nVs \cdot T} \exp\left(-\frac{(Z - nVmT)^2}{2nVs \cdot T}\right) \quad (48)$$

$$\text{mean value of } Z : Z_m = nVmT = V_m \cdot t \quad (49)$$

$$\text{variance of } Z : Z_s = nVs(T^2) = VsTt \quad (50)$$

$$\text{skewness of } Z : S = 0 \quad (51)$$

$$\text{excess of } Z : E = 0 \quad (52)$$

$$\text{in FIG.2} : Z_m = nL, \sigma = \sqrt{Z_s} = \sqrt{n} \cdot L$$

$$\text{in FIG.3} : Z_m = 6L \cdot t/T$$

$$\sigma = \sqrt{Z_s} = L \sqrt{t/T}$$

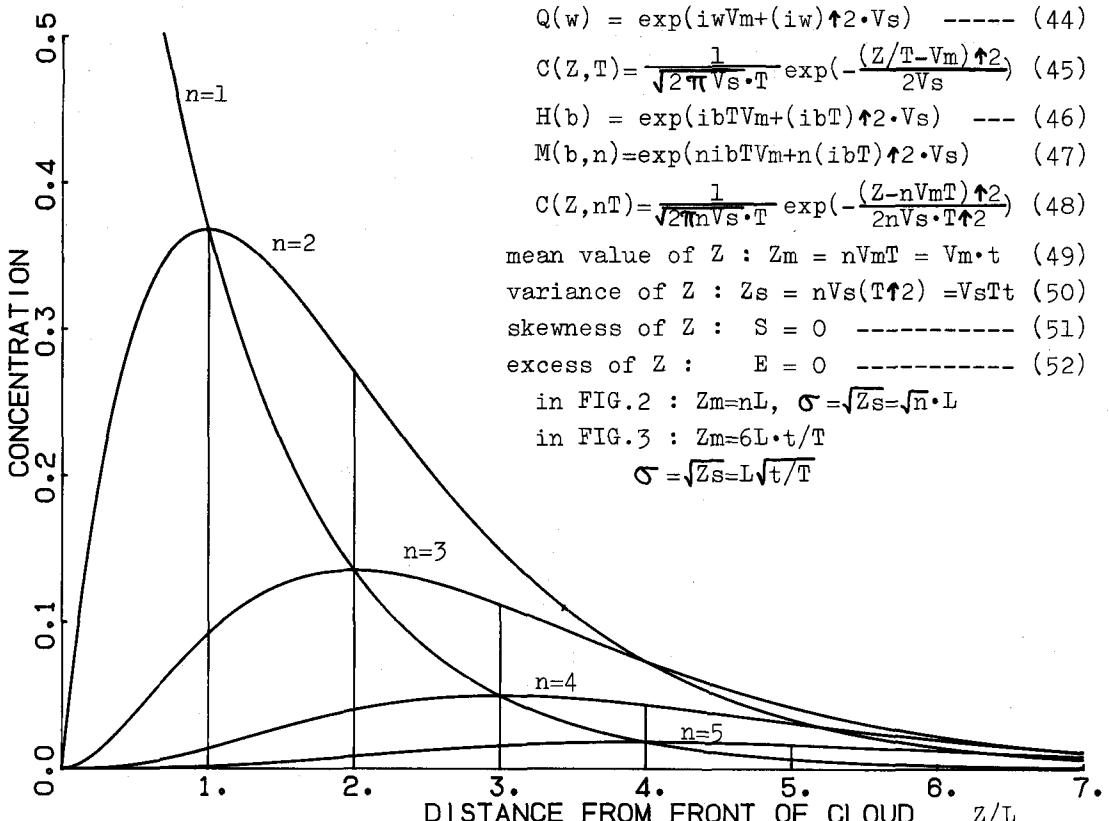


FIG.4 SPACE DISTRIBUTION OF CONCENTRATION
(TWO DIMENSIONAL TURBULENT OPEN CHANNEL FLOW)

の程度ずれているかを示す、ゆがみ S は(38)のように経過時間の平方根に逆比例し、超過 E は(40)で表わされ経過時間に逆比例することが導かれる。また前節で求められた分散係数 D は(41)のようにも表現でき、断面内の流体粒子に関する相関時間 T は(42)から計算できる。

§ 4. 正規拡散過程

正規拡散過程(一様乱流場における拡散現象)は、平均値と分散だけで記述できる過程であり、3次以上の高次キュムラントはすべて0である。 v の確率密度関数は(43)、 v の特性関数は(44)となり、 T 時間後の濃度分布は(45)、そのフーリエ変換は(46)、 nT 時間後の濃度分布のフーリエ変換は(47)、濃度分布も正規分布で(48)と示される。また Z の平均値 Z_m は(49)、分散 Z_s は(50)で表わされ、ゆがみ S :(51)と超過 E :(52)は0である(ホ)。FIG.2は正規拡散過程における濃度の空間分布を示し、FIG.3は固定

< TURBULENT OPEN CHANNEL FLOW >
probability density function of v :

$$f(v) = \frac{k}{U^*} \exp\left(-\frac{kv}{U^*}\right) \cdot U(v) \quad (53)$$

\therefore unit step function : $U(v)$

$$Q(w) = 1/(1-iwU^*/k) \quad (54)$$

$$\text{mean value of } v : V_m = U^*/k \quad (55)$$

$$\text{variance of } v : V_s = (U^*/k)^{\frac{1}{2}} \quad (56)$$

third cumulant of v :

$$V_3 = 2 \cdot (U^*/k)^{\frac{3}{2}} \quad (57)$$

fourth cumulant of v :

$$V_4 = 6 \cdot (U^*/k)^{\frac{5}{2}} \quad (58)$$

$$C(Z, T) = \exp(-Z/L) \cdot U(Z) \quad (59)$$

$$\therefore L = U^*T/k = V_m T = \sqrt{V_s} \cdot T \quad (60)$$

$$H(b) = 1/(1-ibL) \quad (61)$$

$$M(b, n) = 1/(1-ibL)^{\frac{n}{2}} \quad (62)$$

$$C(Z, nT) = \frac{(Z/L)^{\frac{n-1}{2}}}{(n-1)! \cdot L} \exp\left(-\frac{Z}{L}\right) \cdot U(Z) \quad (63)$$

$$\therefore (n-1)! = \Gamma(n)$$

$$\text{mean value of } Z : Z_m = nL = U^*t/k \quad (64)$$

variance of Z :

$$Z_s = n(L^{\frac{1}{2}}) = (U^*/k)^{\frac{1}{2}} \cdot T \quad (65)$$

$$\text{skewness of } Z : S = 2/\sqrt{n} = 2\sqrt{T}/t \quad (66)$$

$$\text{excess of } Z : E = 6/n = 6 \cdot T/t \quad (67)$$

$$Z_s = 2 \cdot D \cdot t \quad (68)$$

$$T = \frac{2 \cdot D}{(U^*/k)^{\frac{1}{2}}} = \frac{0.808}{k} \frac{h}{U^*} \quad (69)$$

$$L = \frac{0.808}{k^{\frac{1}{2}}} h = 5 \cdot h \quad (70)$$

$$\text{in FIG.4} : \frac{Z}{L} = \frac{kU_o}{U^*} \frac{t}{T} - \frac{x}{L}$$

$$\text{in FIG.5} : \frac{kU_o}{U^*} = 7$$

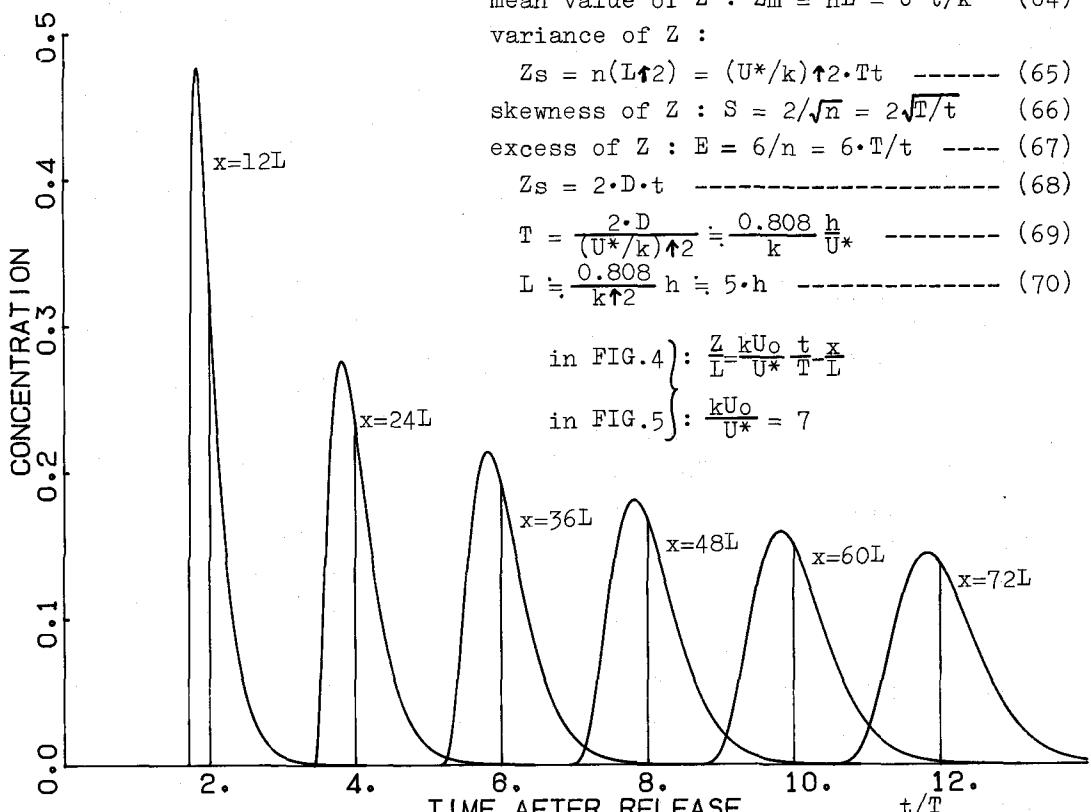


FIG.5 CHANGE OF CONCENTRATION AT FIXED POINT
(TWO DIMENSIONAL TURBULENT OPEN CHANNEL FLOW)

6点で測定した濃度の経時変化を表わす。

§ 5. 二次元開水路乱流

二次元開水路乱流における移流分散過程では、断面内の流速分布が対数分布(15)のとき、 v の確率密度関数は指數分布(53)となり、流れ方向の濃度分布はガンマ分布(63)で表わされる。 v の特性関数は(54)、平均値・分散・3次及び4次のキュムラントはそれぞれ(55)～(58)となる。 T 時間後の濃度分布が指數分布(59)で与えられ、 L は1ステップの拡散幅の大きさを示す。(59)のフーリエ変換が(61)となり、 n ステップ後の濃度分布のフーリエ変換が(62)となり、これはガンマ分布の特性関数を表わしている。従って流れ方向の濃度分布として(63)が得られる。濃度分布に関する平均値・分散・3次キュムラント・ゆがみ・4次キュムラント及び超過は(64)～(67)で与えられる。(68)の関係を用いて相関時間 T と1ステップの拡散幅 L を求めれば(69)・(70)になる。FIG.4は濃度の空間分布を示し、ガンマ分布そのものである。FIG.5は等距離の6点で観測した濃度の経時変化を示し、FIG.3に比較して重心の通過時刻がピークの後にずれており、相当長期間非対称な分布形状が続くことを表わしている。自然河川における観測例をFIG.6に示す(ト)。

§ 6. むすび(結論)

- 1) 移流分散係数を断面内流速の確率密度関数(11)と累積分布関数(10)を用いた積分形で表わした(14)。
- 2) 二次元開水路乱流の流速分布が対数分布(15)のとき、断面内流速の確率密度関数は指數分布(53)となり、流れ方向の濃度分布の経時変化はガンマ分布(63)で表現される。
- 3) 濃度分布が正規分布からどの程度ずれているかを示す、ゆがみは経過時間の平方根に逆比例し(38)、超過は経過時間に逆比例する(40)。
- 4) 断面内の流体粒子に関する相関時間 T は、移流分散係数の2倍を断面内流速の分散で除した値として求められる(42)。
- 5) 偶然累加現象として移流分散を取り扱えば、断面内混合の影響は主に相関時間 T (代表値・一定)を通して表われる。

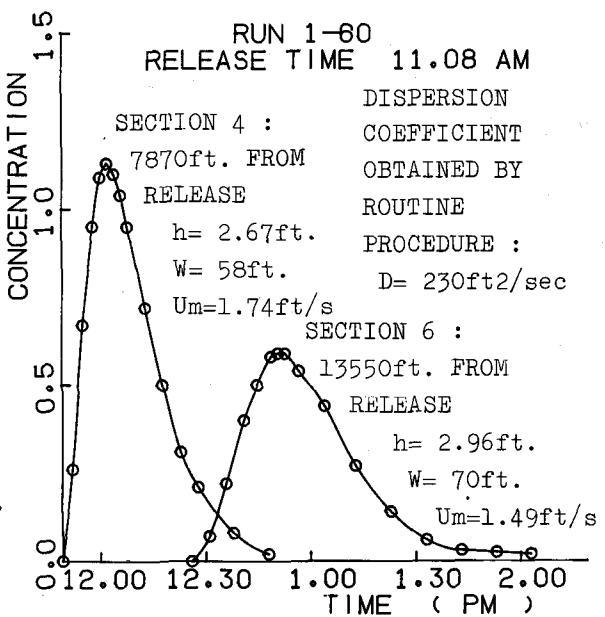


FIG.6 OBSERVED CURVES OF CONCENTRATION VERSUS TIME (DATA IN NATURAL STREAM)

<参考文献>

- イ) G.I.Taylor(1954): Proc. of the Royal Society, London, A.223, pp.446-468.
- ロ) R.Aris(1956): Proc. of the Royal Society, London, A.235, pp.67-77.
- ハ) J.W.Elder(1959): Jour. of Fluid Mechanics, Vol.5, pp.544-560.
- ニ) N.Yotsukura and M.B.Firing(1964): Proc. of A.S.C.E. Vol.90, HY5, pp.83-104.
- ホ) 岩佐義朗・今本博健(1966): 第10回水理講演会講演集, pp.81-86.
- ヘ) H.B.Fischer(1967): Proc. of A.S.C.E. Vol.93, HY6, pp.187-216.
- ト) H.B.Fischer(1968): Proc. of A.S.C.E. Vol.94, SA5, pp.927-943.
- チ) P.C.Chatwin(1970): Jour. of Fluid Mechanics, Vol.43, Part 2, pp.321-352.
- リ) K.M.Atesman, L.V.Baldwin and R.D. Haberstroh(1971): Jour. of Basic Engineering, 93-4, pp.461-477.